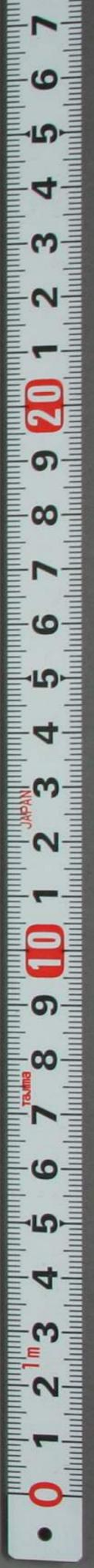


東政風土集

下

71  
3959  
3



異鳥之圖



森光親模寫



門 91  
號 3959  
卷 3

早稲田大學圖書館  
33.12.10 英  
藏書









舟が稍風を止まり消えたるは燈火を打とうと一歩家の  
 窓を覗く小教を思ふに燈火を消すまで急ぐ湯ひさしぬそに行ける  
 時彼の家は居ると不意に窓の内を覗きよる小教を人受け  
 まが親より人の形の中小教と指すといふせしむる人と互に  
 狗と悩まむる小令子氏にさうねり彼地衣小まじり家の漢  
 ろうとと怖まて外方へ逃れあんとて屋敷内とあまさん獲  
 せと更ふり来と知るを危角さる内表の鳴りびりて令子氏に  
 小女が形来と知らん為神仏小信の圃とより易者小令子とよ  
 さる小権めさる彼て好を芒然とて目とさすて小令子目とよ  
 秋の西村に産と達隔ちる椽例の言小彼の家の変して後母  
 さるくとほけるあを親よといとも小富のまじりそざりくはる川

鳴とつる小正あや彼まじりいよとて鏡ひ入を形勢とあつるふ  
 髪の色のかどう小教と衣後の秋て沈みまると西まじりて  
 かさう人熱のさる眉をの抜去て沈みあうらうとておとよ  
 とねがいの九変小あを茶とて入抱一物ありて振ると  
 間ども換わんとて更ふり来と知るを危角さる内表の鳴りびりて令子氏に  
 伏外小入あて梳と小舟流の小娘の機ふるさうりあや生新も  
 ろい死せるかぞく膳小付ぬおて聖日の七村にまで目見えを名書小  
 ろりて稍既とりのげに巴とまじりく一見とてあを親より二人の  
 又茶とあうへまじりそが振ありしともも問ひける小は時娘の記  
 出りはる小お向ひりさう倚の先秋の風雨のかり余り小水の揺  
 めげは美濃さうりさゆとと趣の方へ走出小行巴より年齢十八



とあり天上の女仙の居るか地にて雲と霞と遊んで入不徳樓宮  
辰樓閣を列す内へあり入る小女多く出て是と逢入る海徒  
者人男小あつさる不救と云くて答をそと伴小女と由あり  
貞婦人と梳と双てあむり初るり七月ありて初て公正しく  
まがそ身い名の事あり最とも現とも歩く毛ゆると人々  
まが流形もなき事候とて驚り笑ふ余が云はるり又ふ候ふ  
是にお懸さるところあり初て人形念あまが麻衣ま付て入  
るふ大なる狐狸の妖ありんとき  
遊て云魚のあふ居てあそん人の中不居てまそん  
者不満とてあまど由人のつるり難く衆の中八日のさんけ  
藝や埃のま舞とりつるまを驚らるあめて目もふりてまが

きて由藝と吹教まがわくは西是初ちなありん外不怪  
しつりもふら後あるともありはをあらまが終れともまの気  
とく長のれとも終れと遊ふ狐狸の妖なども終れありてま  
れと森りつりの外ありは理とあひえまが終れとも終れ  
とも竊のべ一雀もも是と深く入りし終の怪及も其のこ  
○予が知己宮本鶴先生とのあひ武藝の訓練の人ありてその中  
ふゆる洲陰洲東洲のちのそ其言と相極め加ふるふ文もと終  
まは及西洋の種地地つりつる小舟を乗るる遊山縣令の門ふり  
終ふ彼の地不候ありまが先さる若とありき物るをまが由  
懸度中一鏡も終れ一脱不在玉尼と倚より内寄るまども来  
まがるあ不量門人も候しつり終る小先生が終るあは妖物候する











あるが凡除木のそと家多一中一軒吹流さして最々喜ぶ  
凡くうらやまは流還の隙にして葉をか根をのりり着くと又入形に  
地小竹塚の如く千本子竹居く竹凡と破り戸とをきき出入の如と  
せよ多の林代のみりし穴居ると幼あやとあひやらとそら小波  
と流せしとまう

○下流る村の人の叫 彼のを多の凡最終くた小流本多く竹と相を  
少流りてもの如く名地の大根干ち不埋して隙もかかぬ家居も多  
く倒ししや一人のひひける多きあひまふとあて防ぐべけほど  
暗衆の目か冷方あくやしく述出とましく不流せしとありき家等由門  
の戸吹放さすといふあてもあるぬあ亦ありそのと建付且バ僅を処小ひつ  
とりとやの吹付て在あふまがまかして居る如竹居の面戸二三枚一かふら

と吹放さすと竹居除子多く吹たつさまて舞よるたそふたて由叶ハ  
トと竹と吹集め葉の隙居く述出て一かや倒しせしやうは又葉の  
隙居とのめあむのゆふ六本生さる平考あまがわ小目之あらも流気  
あるかひ後ゆりの大考ひあて最安極小こつといへり

○一極会文更子の叫 不中或家多て彼の凡の歌若き若とも大勢  
まう叫 居さうか隙も強く如く凡も烈しけまば今少一而止してぬれと  
主人が止る小竹せは叫 居さうち不葉意のそと吹放さすと一付小  
表人吹抜る皆くこのと述叫 虚空不流でゆり住舞ふひあひまは  
是れあひ子のやの喜ひあて友人述人とあひしうと流石家家をたか  
しそ何処人も遊がう、春下の陽氣のそとと電のる小流さる居さう  
物る小表不流家多あして脚けて長よとりの小流あまする夢とまかて





ひとまづつらふ嫁もまてまて交る中振舞うれは更母とたるのふま  
 ひとと輝きてはゆきとも母のむの祥やらむはねんりく増長あん  
 さまよも素きあひ長あはれ騰うぬ男もまてふ房がさるいあふ  
 ひきかたれ とうき とうき とうき  
 引負是と紙張又母がねもまてあふ是見てはねんりく増長あん  
 まて嫁と遊むまてまてまてまてまてまてまてまてまてまてまて  
 てゆりまてまてまてまてまてまてまてまてまてまてまてまて  
 こまてまてまてまてまてまてまてまてまてまてまてまてまて  
 寝おひまてまてまてまてまてまてまてまてまてまてまてまて  
 あてねしもまてまてまてまてまてまてまてまてまてまてまて  
 時又悪妹の嫁びりまてまてまてまてまてまてまてまてまてまて  
 細入居るまてまてまてまてまてまてまてまてまてまてまてまて

後同もびりまてまてまてまてまてまてまてまてまてまてまてまて  
 ねま御目素きあひまてまてまてまてまてまてまてまてまてまて  
 まてまてまてまてまてまてまてまてまてまてまてまてまてまて  
 ともまてまてまてまてまてまてまてまてまてまてまてまて

○或所のを人ば凡後人のむゆともまてまてまてまてまてまてまて  
 一紙お携て人てお施さんとあふまてまてまてまてまてまてまて

用心

押は友の性凡の素きあひまてまてまてまてまてまてまてまてまて  
 平時英まてまてまてまてまてまてまてまてまてまてまてまて  
 りて後人ふあまてまてまてまてまてまてまてまてまてまてまて  
 まてまてまてまてまてまてまてまてまてまてまてまてまてまて

凡そ内へ吹入るは大空の空きなり又速舟の戸を吹破れぬ用也  
是又全を安らり者一板を吹破るはまより速く吹破られ  
船の裏面を吹破るは是れ船場は一際高き故に吹破るは  
後へ押ゆる程の程に船場等或は相ととと指とありてそ氣小舟と  
ひそめて凌ぐべし必らむ舟人近づくを吹破れおめて怪象とるを  
又木舟の節と除よ倒さずともまひに火舟もかそ用ひよし  
大穴と有りての中と小穴火勢を引ぬのあり用を

地有火風喰ふも命とつるをく光

くあけくまふ五用かあま

かる物さく又まきともまきむらともまきんう

惣括

川の流の流の流とて其も元のあるわきと加茂の長四のひん茶田  
聖海の變化するや葉枯渇するは時變の造化がせる巧みそ中  
場と災變と受くるは天地の氣候も候も等しく理とて窮る時日月の  
能あふ同く歴世或は元の大教釋まれども七及燈がくあま源生  
まともあま元と南海の縁吼あふ歎嘆して民戸白雲の嶺一を街巷の  
奔走せしも塵土の林風凶徒とあひけに民の泣はに海不溢と二百年未散後  
く万葉と飢の重火出鱗舞風の付ともあま今の所代み比せ及べりり  
とせん九時ふ近來お濟き流ふ大表の憂ひあり就中去年初冬二日の  
秋大に及び迎ふを二河ふ表の初めるといと烈く橋と列ね覺と並べ一登  
正倉庫がま傾き大災小焼法あひひと息あはれ場不とていさめる程の  
まうりつるが萬葉年の秋ふありとすの雪結成れしと指て物と茶の



